

Title	コールリッジとミル (二)
Sub Title	Coleridge and Mill (II)
Author	由良, 君美
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.1 (1966. 1) ,p.1(1)- 19(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19660101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

- 山崎 功著
『バルミーロ・トリアッティ
——その生涯と業績——』……………飯 田 鼎 106
- 湯村武人著
『フランス封建制の成立と農村構造』……………渡 辺 國 廣 107
- 柴垣和夫著
『日本金融資本分析』……………飯 田 裕 康 108
- P・B・ケネン著
天野明弘訳
『国際経済学』……………大 山 道 広 109

コールリッジとミル (二)

由 良 君 美

さて、岩波文庫の新版として、『ミル自伝』をコス稿本に依存しながら、ラスキ版の伏字箇所を補充しようとした訳者朱牟田夏雄教授が、コス版によつても、なお、ラスキが述べている、「父および妻との関係」にふれた削除箇所とおぼしい部分は埋まらないことに、不審を表明しておられることは、前回に述べたとおりであります。同教授の言葉を次に引用すれば、

「本訳書では、従来の版に欠けていて今回はじめて活字となった部分を、熱心な研究家の便利にもと、「ハ」でかこつて区別しておいたが（すべて第七章のみにかぎられ、合計で十一カ所である）、その部分はすべて上記ミス・ヘレン・テイラー自身に關した記事ばかりであつて、ラスキ教授のいうような「父および妻との関係」にふれた字句は一つもない。また数量的にいつても、十一カ所のうち八カ所まではほんの一行ないし数行であつて、やや長いのは三カ所だけ、その合計は上記「数ページ」……というのにはすこし足りない。……すくなくともラスキ教授の「調査」した原稿と、コロンビア大学の蔵に帰したという原稿とが同一物であるかぎり、前者の記述と、後者による本訳書の「ハ」部分の内容との不一致をどう説明したらよいのか、これは現在の私としては単に「不審が残る」といつておくほかはない。ラスキ教授がいろいろ加減を書く筈がない

けれども、さればといって今回明らかになった部分以外におお欠けている部分があるのだとちょっと信じられない、というところだけを記して、だれかの手によってこの辺の不審が一掃される日を期待したい。(岩波文庫版新訳、五頁)

朱牟田教授は、ホランダー稿本の出現をまたず、コス版に従って訳されたのであるから、右の疑問は当然のことであったといえましょう。ステイリンガーは校訂に際して、ラスキがこの点、どのような考え違いをしたのかは、序のなかで別に述べるところがありません。しかし、ホランダー稿本を検討すれば、ラスキの考え違いが生じた理由は推測することができます。ラスキが、『自伝』の草稿の売立てに立ち合った時、明らかに既述の三種の草稿が一括されていたことは、サスビー書店の売立てカタログによって明らかであるから、ラスキは、ホランダー稿本に相当するものも「検討」していた筈であります。しかし、いかなる意味での検討であったのか。原稿の用紙、スカン、書体、加除者の筆蹟、それらを勘考した上で年代の決定を主要な作業とする筈の綿密な検討は、書誌学的能力においても時間的制約においても、「思想家ラスキの」手に余る難事だったようである。彼の眼前には、ヘレン・テイラー稿本の前身をなす草稿として、コス稿本とホランダー稿本との二束があったわけであるが、ラスキは、ヘレン・テイラー稿本の前身は一種類と速断し、削除はすべてヘレンがなしたものと信じたらしいのであります。実はしかし、前身となる原稿も終稿と草稿の二種があり、削除訂正も、ヘレンの手になるものに他に、本人自身によるものとミル夫人ハリエットによるものとの三者があったのであるが、ラスキには、この間の鑑別力は働かなかつたのであろう。従って、ホランダー稿本で、ミル自身が本文から削り、原稿に添付して保存していた教葉を、ラスキは、『自伝』終稿の本文から、ヘレンが削除したものと誤断するに至り、これを「父および妻に関する」削除部分と記するに至った、というのが、恐らく、事態の真相なのである。ホランダー稿本で、校訂者により、「第三部」として、「省略草稿」(Rejected Leaves)という見だしの下に、今日印刷に付されている部分こそ、ラスキのいう削除箇所に対応する性質のものに相違ないと、私は判断せざるをえません。

ラスキは、ヘレン・テイラーが完稿に加えた『改ざんは、現行のテキスト(ヘレン・テイラー稿本のこと)に明瞭である。……私が……検討したところでは、現行のテキストはミル自身が遺した形のものより、約六頁分ほど少ないと結論せられたのでありますが、ここから、当然、削除はヘレンがすべて加えたものである』(Worlds Classics Edition, p. xi.)と誌したものであるから、ミルの原稿にもともとあったという「父および妻との関係」にかんする部分も、「第七章」に属するものではない、という臆測がでてきたのは自然なことでありましょう。現にヘレン・テイラー稿本をラスキ版に基いて訳出された西本正美氏は、「訳者序」で、右のように臆測したと思われることを述べている(『ミル自伝』旧岩波文庫、三頁)。朱牟田教授の既述の素直な不審の表明は、これを受けて、なされたものでありましょう。

ホランダー稿本の「省略草稿」とは、ステイリンガーが、初稿の省略部分を、'rejected folios' (R 'rejected folios of the original Part II of the draft' (R II)として分類し、イリノイ版ホランダー稿本の一七六頁から二〇〇頁にわたって収録しているものであり、このうち、R 23-25, 24^a-25^a, 19/20, R31-37' が父にかんして、R 105-106' がコントとサンシモン主義について、R II. 1-8, 20, 24' が妻ハリエットにかんして触れた内容になっております。分量からいっても、内容からいっても、ラスキの記述と符合するものと思われまます。父にかんするものは、現行のコス稿本では第一章の「少年の頃と初期の教育」の部分に位置すべく、コントとサンシモン主義にかんするものは、その第二章「少年期にうけた道徳的影響」に、妻にかんするものは、その第六章「わが生涯の最も貴重な交友のはじまり」の部分に位置すべきものであります。これらは、(R II. 20, 24をのぞき)ステイリンガーの考証によれば、一八五四年一月二十三日までに、ミルの手によって書きおろされ、始めの部分は夫妻によって一緒に読み直され、かつ改稿され、その後、ミルによって初稿から省略せられるに至ったものであるらしい

い。ホランダー稿本の成立時期にかんして、ステイリンガーは書誌学的考証の結果、『大体一八五三年から五六年』と結論し、さらに、ミル自身の言を文字どおりにとれば、この時期は『一八五二年十月以降から……一八五六年三月以前』に縮めうるもの (Hollander, p. 5) といっている。この年代決定は、ステイリンガーに先だつて、A・W・レヴィーが、一九五一年に、『一八五三年四月から一八五四年四月までに、始められ、終えられたもの』とした判断 (cf. A. W. Levi, "The Writing of Mill's Autobiography", *Ethics*, LXI, 1951, pp. 284-296.) との間に多少のズレが見いだされるが、いずれにしても、ハリエットの「一八六一年―七〇年」説およびラスキの「一八六八年―一八七三年」説とも異なり、大幅に、年代を遡らせるものでありましよう。ステイリンガー説を信用すれば、ミルは『自伝』初稿を四十六歳にして書きはじめ、五十歳にして書き終えたといえるのであつて、ラスキの説くように、六十七歳で没した『ミルの生涯の最後の五年間に書かれた』ものではないことになります。さて、私は前回、ミル『自伝』が晩年の作であるならば、現行の強引な三分法によって割り切られた構成がとられる筈がないという疑問をのべておきました。この疑問は、ホランダー稿本の出現から、中年ミルの作品であることが実証されたことによつて、解決の糸口をみいだし得たと思ひます。それでは、一八五三年頃のミルを、このような「強い視力」で、『自伝』の執筆にかりたてさせる何があつたのであろうか。疑問は当然、これに移らざるをえません。

(3) 初稿執筆の動機

ミルが世の誤解を押し切つてハリエットとの結婚を実現したのは一八五一年四月三十一日のことであります。妻が肺患に侵されていたうえに、ミルも肺病の宣告をうけたのは、一八五三年のことなのであります。しかも、両者の肺患の状態は従来、経験したことのない重態であつて、ミル夫妻にとっては、結婚の喜びも束の間、一八五三年という年は、最も深刻な年となつたのである。このため、二人は南フランスに向つて療養旅行を試み、ニースで十一・二月を送る。ミルは所用で一八

五四年一月にロンドンに單身帰り、ついでパリエットも四月十五日にミルとおちあつている。この期間、ミルは自分の健康に全く自信を喪失し、一八五五年のクリスマスまで、果して生きのびることができるかと氣遣つていたほどであります。その心配をつのらせたのが、生きているうちに、『自伝』を書きあげられるかどうか、という心配であり、この時期に、妻に宛てた書簡には、『自伝』(『書簡集』では単に「Life」として頻出) にかんする記述が目だつてくる。しかも、一八五四年二月から四月にかけて、ミルは、珍しくも日記を付けているのである。(Hugh S. R. Elliot (ed.), *The Letters of John Stuart Mill*, London, II, pp. 357-86.) この『日記』は、間近かに迫つてくる死の予感によつて埋められているといえます。「間近かき死」(三月二十五日)、「死が私に迫つてくるとき」(三月三十日)、「死に瀕するとき、最も不快なるものは、耐えがたいアンニュイである。」(三月三十一日)、「健康が衰えゆくときほど、大自然の輝かしさと陽さしうららかな姿の及ぼす効果が、心をなだめ快適にしてくれるときはない。死ぬ前に、丸一夏を眼のあたりにすることを、私は非常な好運のひとつに数えたい。」(四月三日)。

これと併行して、夫人宛ての書簡には、『自伝』執筆にかんする言及がみえ、彼女に助言を要請する言葉が増えてくるのであります。こうみてくると、『自伝』はもともと、功なり名とげた静朗な晩年のミルのものではなく、結婚間もなく、病妻と別れて住まざるをえなかつた四十七・八歳のミル——それは実は彼の、おそまきの青春だったのであるが——が、忍びよる死の影に駆りたてられて、『自分の書いた最良の本』(一八五五年四月の書簡)となるべきものとして執筆したものだつたということができます。だから、『自伝』の背後には、夭折を予感したミルの末期の眼が働いているのであり、この眼が、『自伝』に、ある種の強いいられた調子を帯びさせ、また、一種ぎりぎりの心境のみがもつ、誠実さと緊張とを与えるものとなつたのでありましよう。

ベンサミズム時代、反ベンサミズム時代、平衡回復時代という大胆な三方法を可能にしたものが、夭折の予感による末期

の眼の光学であつたとすれば、この三分法のクライマックスに相当する反ペンサミズム時代の、いわば理由づけとなつてゐる。「我が生涯の精神の危機」は、ホルンダー稿本の出現により、どのような新たな光りを浴びることになるでございましょうか。すでに述べたように、ミルのコールリッジとの出会いは、この「精神の危機」においてのことだったのである。従つて、『自伝』の曲折した成立事情をもとに「精神の危機」の实体を再考することは、「精神の危機」の理解に資すると同時に、ミルとコールリッジとの関係の立ち入った解釈に、なにか新しいものを与えずにおかない筈であります。

初稿であるホルンダー稿本の第一の特徴は、終稿たるコス稿本もヘレン・テイラー稿本も七章構成であるのに対して、章構成がなされていないことにあります。この点につき、ホルンダーは、「省略草稿」の「RH」が「第二部」(Part II)と題してあるところから、もともと、ミルは『自伝』全体を二部構成にする目的で書きはじめ、第一部を妻との出会い、第二部以降をそれ以後にあつてつのもりであつたのが、書いているうちに、第二部が第一部に比して、不当に短いのに気付き、均衡上、第二部の最初の八葉ほどを三つ半に分け、パラグラフを更に細分したりしながら修正してみたが、結局、二部構成を全く放棄するに至つたのであらうと考えています(Holander, p. 41)。これは注目すべきことであります。この二部構成案は、初稿執筆当時のミルが、妻に与えていた比重の大きさを物語るものであり、極端にいうならば、自分の生涯を前後二分したほどの大きな要因を、妻に与えていたことを物語るものといえるからであります。

思想的自伝の面での三分法と生活的自伝の面での二分法とは、どこかで重なつていなければなりません。前者のクライマックスと後者のクライマックスを、おなじ「出会い」という性質から見れば、前者はコールリッジおよびロマン派との出会い、後者はテイラー夫人との出会いという性質をもつ出来事であり、邂逅という性質が、両者の結接点であるといえる。コールリッジとテイラー夫人とは、ミルに回心を与えたといえる意味において、重い比重を担うのであるが、この二つの像は、ミルの内面において、どのように結びつけられていたのでありましようか。

(4) 精神の危機の実相

ヘレン・テイラー稿本とコス稿本に基づく限りでは、この結びつき、この邂逅性について、納得を得ることはできないように思われ、ホルンダー稿本がミルの成長史の内在的理解に対して与える最大の寄与のひとつは、この間の消息について、より多くの解釈を可能にしてくれるところにある、と考えられます。「精神の危機」がいかにして生じたのか、またそれを克服したというミルの、克服の方途はどういうものであり、その方途は現実のテイラー夫人との出会いと、どのように関連するのか。「精神の危機」の生じた原因については、ベンサムの *Rationale of Judicial Evidence* の校訂から生じた、極度の身体的頭腦的疲労にその直接の原因が帰せられてきました。しかし、「精神の危機」は、あくまで、『自伝』においてはミルの心情と思考の転機にかかわる重大問題として叙述の対象にされているのであつて、ただの「疲労」が生んだものとして扱われているのではないことを、この際忘れてはならない筈であります。とはいえ、従来の版本には、「精神の危機」の「失意」が生じた原因を自から説明する言葉はなく、徒らな臆測を許すはなかつたのも事実であります。

父ミルの厳格な日課の下に、異常な早期教育をうけたミルは、三歳にしてギリシヤ語、八歳にしてラテン語を学び、コンドルセと観念連合心理学説に忠実に依拠して、ベンサムの理念の実現をめざす父ミルの独自の教育計画に従つて、ペンサミズムの権化ともいふべき天才青年に成長する。この青年が二十歳の秋、突然に襲われたのが、「わが生涯の精神の危機」である。

コス稿本に従つて「精神の危機」を要約するならば、大要、つぎのようになるでございましょう。

「一八二六年の秋、私はすべての者が時々おちいりがちなように、神経の鈍麻した状態にあつた。すべてのものごと、す

すべての従前の理想は魅力を失い、「私の生活を支えていた全基盤がガラガラと崩れおちた。」この崩壊の感覚は、ミルが「かりに、おまえの生涯の目的が全部実現されたと考えてみよ。おまえの待望する制度や思想の変革が全部、今このときに完全に成就できたと考えてみよ。これはおまえにとって、果して大きな喜びであり、幸福であろうか」と自問自答したとき、彼のなかの「抵抗しがたい自意識」が、はつきり「否！」と答えたときに起った。この「全基盤」・この問いの内容は、ベンサム主義の、ひいては哲学的急進主義の全理想を要約していたものであった筈である。父ミルの監視の下に、徹底したベンサム主義者となっていた青年ミルを、このとき、彼のなかの隠れた自我が一挙に否定したのである。「父の計画は失敗に帰したわけである」が、周囲に父と父の友人しかもたなかったミルとしては、「私の心境を分ってもらえる望みのある人」は全く求め得なかつた。「舟よそおいをととのえた舟に楫もつけて舟出しながら、帆がないばかりに、航海にでたと思ったたん、立往生した」彼は、生への起動力を失い、「憂鬱な冬」をすごさねばならなくなってしまう。彼の心境を最も的確に代弁すると思われたのは、コールリッジの詩であつたという。「あらゆる作家のうちで、私はコールリッジのみに、私の心境にピッタリした描写をみいだすことができた」と。コールリッジの『失意の頌』、『希望なきつとめ』を、しみじみとした共感をこめて引用する彼なのである（朱牟田訳二二二、二二六頁）。はじめ、一八二八年の秋に、ワーズワスの詩を読んだことが、彼に救いを与えることになった。そして初期のカーライルの仕事にたいする眼も開かれた。とくに、仏人マルモンテルの『回想録』を読み、そこに、父を失った一家の悲嘆と己れの義務の自覚を描いた所を読むに及んで、にわかには、眼から鱗がおちたような想いをします。こうして、彼は、ふたたび、「人生を楽しむ」ことができるようになった自分に気づいた、というのであります。

彼はこの失意のなかで、自分の受けた早期教育の基盤をなしていた思想の認識論の当否を吟味します。この認識論は、功利主義の思想体系の骨格をなす観念連合心理学である。「私はこれまでの学問のやり方から、すべての知的・道徳的な感じ方とか傾向とかいうものは、いいほうにせよわるいほうにせよ、みな観念連合の産物である。われわれがあることを愛したり憎んだり、ある種の行動や思索に快感を感じたり苦痛を感じたりするのは、教育や経験の結果としてそういうものに快い、あるいは苦痛な観念の連合がまつわりついているからである、信ずるようにしむけられてきた。そのことの自然の帰結として、私はいつも父の口からくどいくらいに聞かされもし、私自身確信するようになっていたのは、教育の目的はできるだけ強力な有益な観念連合を作ってやること、いかにえれば、全体に利益をもたらすようなことには快い観念連合を、また全体に有害なことにはすべて苦痛の観念連合を、与えてやるということであつた。この原理がゆらぐことはないと思つてきたのだが、このころになって過去をふりかえってみると、私の師たちは、こういう有益な観念連合を生みだしたり維持したりする手段に熱心だつたといつても、それは単に表面だけのことだつたように思えてきた」と。このようにして造られる「観念連合には、どこかに必ず人工的な不安定な点があるに違いない」とし、自然な永続性をもちえないものではないかろうか、と。さらに、観念連合心理学に代表されるような分析性が、ミルに与えた教育上の習慣から、ミルは分析が自然な内発性に先行して働く人間となつてしまつて欠陥に反省を強いられてゆく。「分析の習慣というものは快楽なり苦痛なりの気持をすりへらす傾向があることを、私は悟つたか、あるいは悟つたと思つた。」この時期の体験によつて、ミルは「あたらしい生の理論」(a theory of life, very unlike that on which I had before acted, Coss, pp. 99-100.)を採るに至る。それは旧来の「信念」であつた「幸福があらゆる行動律の基本原理であり、生の目的である」という考えは「微動もしなかつた」が、それにはしかし、「幸福を直接の目的にしない場合に、かえつて目的が達成される、……他人の幸福、人類の向上、なにかの芸術でも、研究でも、それを手段としてでなく、それ自身を理想の目的としてとりあげる」ことが大切であり、その方が、かえつて副産物として幸福が訪れる、という考えであります。それはさらに、「個人々々の内的教養」を「さらに正当に重視」し、「外的状況を整えるとか、人間を思索とか行動とかのために訓練するとかいうことだけを従来重視してき

たのが、ここでおしまいになったわけである。」要するにミルは、「働きかける能力だけでなく、受動的な感受性をも養うこと」の必要を痛感するに至ったという。

コス稿本で読みとりうる限りの、「精神の危機」にかんする記述の要点は、大体、右のようになる筈であります。

環境改善、思考と行動の訓練、正しい観念連合の習慣化——これらがベンサム主義教育の根幹をなすものであるとすれば、これらが、行為の表面のみに関係するものにすぎず、永続性と自然性を欠き、従って、分析の習慣化とともに、行為の深部に潜在する内発的なるものを喪失さすに至り、生への起動力をミルに失わせ、彼を銷沈の淵に沈めたという。とくに、個人的幸福の問題にかんして、ベンサミズムの理想は、個人の幸福に食いつくす力をもたず、かえって感性を涸渇させるに至るといふ。ここでもかりに、ミルの説くベンサム主義を「Positive capability」の涵養をめざすものと言いうるならば、コールリッジ・ワーズワス等のロマン主義との接触によって、失意のミルが幸福論を介して醒めたのは、「Negative capability」の涵養の必要性であった、と一応要約することが許されるであります。この二つの能力の対比のもつ思想史の意味については、のちに、もう少し立ち入って触れる予定です。

ところで、ミルをこのようなベンサム主義の教育理念にもとづくモルモットとして飼育したのは、父ミルの与えた早期教育であります。その早期教育の内実については、コス稿本では第二章の「子供の頃と少年期の教育」および第二章の「少年期にうけた道徳的影響、父の性格と意見」が詳述しております。しかし、良く吟味してみると、詳述されているとはいふものの、その早期教育にたいして、ミルがなした反応については、さらにいえば、このような父と子との関係において、ミル自身が父にたいして抱いた情念的なものの内容は、意外にも叙述の外にされており、詳細でありながら、実は具体性に乏

しいことに気づくのであります。一体、外面的・表層的・知的・能動的な早期教育のために、内発的・深層的・感性的・受動的なるものの重要性を思い知るに至ったと告白する人間にしては、この早期教育の描写の具体性の欠如は、説明そのものに説得性を失わせる結果になっていると申さねばなりません。この具体性を、ミルは故意にどこかに隠しているのですが、われわれは、ミル父子の間に生じていた情念的なものの実体を、この具体性の追求のために、探索してみる必要があります。これが見つかれば、「精神の危機」そのものの内実も、釈然としなでありません。

ミルが、この「危機」から脱却していった過程で、助けとなったものとして挙げているものに、コールリッジ、ワーズワス、カーライル等のロマン主義的原理、それに関連するものとして、芸術・間接的幸福の追求があり、それらはすべて、彼の転身の原理的問題にかかわるものといえるのに反して、見落してはならないのは、マルモンテルの『回想録』を読んだことから突然、眼が開かれたという告白は、決して、原理的問題にかかわる事実ではない、ということではありますまいか。にもかかわらず、ミルは、この両者を、「危機」からの回復の助けとなった要因として並記しているのであります。これは重大な事実であります。父マルモンテルが死に、

「一家が悲嘆に暮れていたとき、まだほんの子供だった彼に、突如靈感が湧きでて、自分こそ一家のために、なにかも引受けてみせる……と感じ、みなにもそう感じさせたという一節にさしかかったのである。その情景なりその時の感情なりが、わたしには鮮やかに理解され、わたしは涙を流して感動した。この瞬間から、わたしの重荷は軽くなった」。

これは、どうみても幸福論とも内的教養論とも、全く無関係であります。にもかかわらず、ミルは、この読書経験が「危機」脱出の突破口になったという。たしかに、この前後は、不思議に説得的な文脈であります。この説得性は、おそらく、

さきに、「父と子との関係の情念的なるもの」と私が述べた事柄を、珍しくも、この読書経験の記述が孕んでいるからではないでしょうか。フロイト主義者ならば、ここに、青年ミルの「父親コンプレクス」の読書経験による解消を、秘められた「父にたいする殺害願望」の「代償行為」を読みとる筈であります。おそらく、青年ミルはこのとき、彼にとっては唯一の権威であり、彼を飼育したすべてであり、ある意味ではミルそのものであり、従ってミルを自己喪失に陥らしめていた父の重圧から、はじめて自由になったのである。マルモンテルの父の死の描写を読み進みながら感動し、いつしか描写渦中の人となることによつて、マルモンテルは彼自身に、その父はミルの父となり、想像の裡におれの父の死を体験し、観念としての父の権威を殺し、ミルははじめて、ミル自身になったのであります。実存主義者ならば、ここに、ミルは、自己喪失から、「本来的自己」を回復し、自己の *Teniteit* を把持しえたのである、と説くことでありましょう。これは恐らく、「精神の危機」と「早期教育」とをつなぐ脈絡をミルに内在して与えてくれる情念の回路であります。

コス稿本では、このように情念の回路は隠されてしまっているのですが、もともと、初稿においては、この回路は明瞭に顕在していたのであり、あらかじめ、これを強調しておくことによつて、後述の「危機」の実態を血の通ったものにするように仕組まれていたのであります。ホルンダー稿本で、さきに「省略草稿」として紹介した部分の父に関する記述は、いかに初稿起草当時のミルが、この情念の回路を、なまなましく訴えようとしていたかを明らかにしてくれます。すなわち、

「私が信ずるところ、私の教育がもともと持っていた必然性によつてではなく、むしろその必然を欠いていたことのために、私は毎日の生活の日常のことどもにおいて、非常に拙劣な人間に育ってしまった。自分の衣服を自分で着られるようになったのは、ふつう一般の子供たちより、ずっと後になってのことであつた。飾り結びができるようになるのに、何年かかつたか、覚えがないほどである。発音も、ながいあいだ不完全であつた。たとえばアーの字 (a) など、ほぼ十六歳ご

るまで、発音できなかつた。最小限度の手先きの器用さを要するにすぎない仕事でも、なにによらず全く出来たためしがないかつたし、今もできないのである。また、ありふれた悟性能力を實際面に応用することすら、全くできなかつた。たえず私は、拙劣で不快なゴマカシをすることが必要となり、このようなゴマカシを、漸次に、しかも不完全に、脱却していったのである。私は全くのボンヤリであつた。父がたえず言っていたように、私は、まるで五官を欠いた人間のようなであつたのだ。眼も耳も、私には無用に思われ、眼前にあるものを、ほとんど見も聞きもしなかつた。たとえ実際に見たり聞いたりしたことですら、私はほとんど本当に見ていもせず、記憶してもいなかつたほどであつた。

父は、これらのことについては、全く私と反対であつた。父の五官や精神能力はつねに生き生きしており、父はその決断力やエネルギーをあらゆる行住坐臥に生かしていた。このことと、父の才能とが、父と個人的接触をもった人々にたいして、大きな印象を与えるのに寄与していた。父が私に与えた教育は、しかし、それ自体を考えると、私を行動するように訓練するというより、むしろ、頭で、知るように訓練するのに向いていた。……父は愚鈍が我慢できず、いかなる形であらわれたいものでも、繊弱で縮りのない習慣が我慢できなかつた。私がこういう習慣を示したために、父の激怒を買つたことは再々であつた。私のあらゆる面のボンヤリについて、子供の頃から、父が私を叱責したことを覚えている。こういうことをしているから、おまえは、たえず悪い習慣を身につけ、決してそれをすて得ないのだ、覚えるべきことをたえず忘れ、常識を欠いた者のように判断したり行動したりするようになるのだ。こういうことが、おまえをただの偏屈にし、皆から見下げられ、生活のありふれた目的のすべてに、ふさわしくない人間にしてみましたのだ、と。……習慣が損われ、怠惰な趣向が生れるか、年下の者と遊んだので、身体上精神上の活動への刺激は、ほとんど得られなかつた。……家庭的なことにおいては、すべて、自分でやらずとも他人にやらしてもらえたことは、これまた私の大きな不幸となつた。」(Hollander, pp. 178-181.)

さきに引用したコス稿本の「精神の危機」にかんする記述にみられた、ミルの過去の「有益な観念連合の習慣」作りへのみむけられた教育の欠陥と、それに由来する、行為をうながす内発性の欠如とは、右のホルンダー稿本の具体的叙述によって、はじめて、納得のゆくものとなっている。ミルの父は、しかし、このような日常の事柄にミルの能力を行使させる必要を全く認めなかったし、四六時中、沢山の子供をかかえた母の方も、そのような訓練をミルに与える暇は全くなかったという。さらに、右の引用箇所を書き直した別稿では、「父の与えた教育は、それ自体を考えれば、私を行為すること (to do) よりも頭で知ること (to know) へと訓練する方に遙かに向いていた。たいていの少年は、肉体的な器用さとか実際の技術や工夫を、ひとりにされるときか、他の少年との競争や葛藤によって、自分自身の内発的な活動によって獲得してゆくのであるが。」(Hollander, p. 182.)と改めている。内発性獲得の機会を失わせ、知育に傾くことの多かった父の教育が、はっきりと説明されていよう。

ミルは、父は本来、情操面は豊かな人であったが、イギリス人にありがちな感情を押しかくす傾向・妻と性格が合わなかったこと (his ill assorted marriage) ・峻厳な性格などのため、ミルに対する教育において、このような欠陥を生じさすに至ったとみています。その教育は峻厳を極めたものであったらしく、ミルは、父自身が、子供の勉強時間を設け始めてからは、子供たちが父にたいしてなつかなくなかったことを嘆いたと述べる。「あの勉強が始まって以後は、遅かれ早かれ、父の厳格さへの恐怖心が、父にたいする子供たちのあらゆる他の感情を飲みこんでしまったからである」と。(Hollander, p. 183.) ミルはこの関係を、「最も有害なりしもの」と呼び、「父の子供たちは、彼を愛さなかった」という。こうして、ミルは簡潔につきのようになります。

「かくして私は、愛情の欠如と恐怖の現前のなかで教育された。このような訓育というものが、私の道徳的成長を妨げた効

果は夥しく、また拭いがたい。」(Hollander, p. 184.)

父の像は、恐怖の像となっております。このような強大な父の権威は、ミルの徳性の涵養において、どのように作用したでありましょうか。ミルはいいいます。

「少年時代を通じて、強烈な意志のたえざる支配下にあるということは、たしかに、意志の強さ〔をもつようになるの〕には望ましくないことである。私は、自分のなすべきことを直接の指令の形ちか、するなという譴責の形ちかで、命令してもらうのを予期するように、あまりにも習慣づけられてしまったため、私は、道徳的な主体としては、私の責任を父の上に転嫁する習慣がついてしまい、自分の良心は父の声においてしか私に語りかけることがなくなった。……かくして私は、内気になり、他人の先導を待つ習慣を、道徳的な内発性の欠如をもつようになり、誰か他人の訴えによって呼びさまされない限り、道徳感覚も、また知性の大部分も、全く活動しないようになってしまった。」

その実際の死に二十五年先だって、一八二六年に、父を想像の地平で死なせることができたミルは、これより生涯の第二期に入り、思想の上での成熟の契機を、自己の主体の回復によって掴むことができたのである。「精神の危機」の「失意」、その「生への起動力の欠如」の状態についての記述は、右の、「早期教育」にたいする一種の怨恨を宿した情念を介して読むことにより、思想面と内的動機面との間に脈絡がつけられる。「自伝」の「精神の危機」にかんする中心的な一章は、異常なドキュメントである「早期教育」を論理的にも感情的にも、不可欠の前提としていた章であったということが出来る。父にたいする情念は、「初稿」においては、いたるところにあり、たとえば、「ウエストミンスター評論」寄稿の時代をふり

かえるあたりの、「この執筆陣のなかで、私は己れを最重要人物と自任することはできなかった。とりわけ父が生きているかぎりには。」(Hollander, p.158.)という不思議な口吻のごときは、ミルがこの傍点の部分を、初稿訂正の際に慎重に除去していることを想い合わせると、さきにも述べた、父への秘められた *realist* が本人の自覚にのほるほどあったことを示すに足りるでありましょう。ともかく、ホランダー稿本はコス稿本に比し、細部に富み、生活のヨリ充分なヨリ多様な描写を含んでいたものであるが、ミルはこの特徴を、コス稿本に脱化させ際に、家庭関係と父の描写にかんする部分を極力薄め、ボカす方向に訂正していったことは、ヴァリアントを辿ることにより、明らかに指摘できる事実なのであります。父にたいする語気は、いたるところで弱められている。父の「権威と激怒」は「不快」に変えられ、ある初稿の異稿に父がミルの舌足らずの発音を「悪しざまにからかった」とあるのを全く削除したり、早期教育の性格につき、「私のうけた教育は愛の教育ではなく、恐怖の教育であった」というのを「私はこの厳しい教育により、得をしたのか損をしたのか分らない」とボカしていることなど、枚挙に暇がありません。特に目立つのは、父をベンサムその人にたとえる書き方が「初稿」においては著しいのが、「コス稿本」では、むしろ父への讃辭に変えられる傾向があることであります。自己の能力についても、初稿での自己評価の厳しさは、自讃には決してならないまでも、著しく弛められております。

さて、「精神の危機」を経て、「早期教育」から必然的に生じた己れの生の理論の欠陥に気づき、コールリッジ等のロマン派の生の理論の内発性・感性尊重性との邂逅によって、思考の面でミルは一つの変革を経過したのであるが、この邂逅は、実人生のうえで、もう一つの邂逅をミルに準備することになります。父の権威にたいして批判が可能となり、父から觀念の上で解放され、生れて始めて自分で自分を充足し、自分の運命の梶をとる可能性をもつ男になった青年ミルにとって、なお欠けていたものは、当然、女であったことになりました。『自伝』第六章「わが生涯の最も貴重な交友のはじまり」は、もはや、とうてい青年とは称し得ない中年のミルが、やっと掴みえた生涯の伴侶としての女、ハリエット・テイラー夫人との

交友、その後の二人の結婚、彼女への恩義にたいする感謝の、過剰なまでにラプソディックな描写によって埋められております。「精神の危機」を通じて、「詩は論理よりもヨリ高度である」ことを悟ったミルは、この女性において、「カーライル以上の詩人、ミル以上の思想家、父以上の自由と進歩の鼓吹者」を発見することになる。現実のテイラー夫人が、ミルの描いたほどの能力の持ち主ではなかったことは、恐らく多くの研究の示すとおりであります。(たとえば、F.A. Hayek, *John Stuart Mill and Harriet Taylor*, Chicago 1951. H.O. Pappé, *John Stuart Mill and the Harriet Taylor Myth*, Melbourne, 1960.) しかし、少なくとも、ミルの眼にとって、ハリエットが、おのれの欠陥の一切を補なう三者兼備の女性として写っていたという、ミルの心の真実の方が、ここでは一層重要な筈であり、また彼女との邂逅は、ミルのロマン主義原理との邂逅と、本質において、相通するものをもっていたことの認識の方が、同様に、ここでは一層重要な筈なのであります。

ホランダー稿本の「第二部」(「省略草稿」の含むもの)は、ハリエットとの邂逅の性質について、ミルの心の真実を、父の場合と同様に、コス稿本よりも直接に伝えてくれるように思われます。父との関係について、いかにその教育はミルの「道徳感覚の不活発化」を招くことになったかを縷々とのべながら、ミルは「内発的」(spontaneous)という言葉を用いておりました。ハリエットを語るミルの言葉には、あらゆる面における「内発性」の美德をハリエットに帰そうとする意気込みがみられます。印象や経験を必ず知慧の源泉とせずにおかない彼女の「内発的な諸能力の傾向」(Hollander, p. 192.)、「個人的感情の内発的衝動から発しない限りは」(Hollander, p. 197.)等々。内発性の美德の権化として考えられている彼女は、ミルにとって、「内面的には、彼女は、深い強烈な感情を備え、透徹せる直観的知性を持ち、最も冥想的かつ詩的性格を備えた女性」であり、常人よりも「十倍も衝動が強く」、「快苦の感情が常人の十倍も強い」(Hollander, p. 192.)内面的感性の抜んでた女性として写り、「内的冥想の生活」を送る女性であり、知性と思考において詩人シェリーに最も近く、(cf. Hollander, pp. 196, 199.)ミルに「新しい体験の思考と感情、冥想の新たな対象」を与えてくれた女性として映るのであります。

ミルのロマン主義的原理との邂逅の特質は、その「内発性」と「道徳」との不可分の関係の認識に、少なくともその最も著しいもの一つを求めるとすれば、ハリエットとの邂逅の性質を「内発性」の美德が決定したのも、当然と考えなければなりません。そしてこの「内発性」の問題の認識と邂逅によるその欠如の充足こそ、ミル「自伝」の思想的自伝としての抽象的側面の三分法と、生活史的自伝としての具体的側面の二分法とを、情念の脈絡において、重ね合わせてくれる結接点であることが、以上により、理解されたことと考えます。

(5) ミルとロマン主義

ミルのロマン主義との接触は、たしかに決定的なものであり、ミル自身が、「私の思考法に生じた唯一の実際の革命であった」とコス稿本においてすら承認しているほどであるわけですが（Cos. p. 133）、果してミルは、ロマン主義の原理を、本当に、彼のベンサム主義を「革命」しうるほど、深く受けとめたのでありましょうか。これは、ミル晩年の社会主義的傾向の程度如何の問題とも切り離し得ないことであって、私としては、単にミルを以て、修正功利主義と説き去る従来の議論に満足できない気がするのも、おのずから、この問題につながってきます。ミルは、ロマン主義の原理を、主として内発性の問題として道徳行為との関係面においてのみ理解し、その理解の契機が、上述のごとく、父との関係の特殊情念なるものを媒介してなされ、かつ、その契機が転じて、テイラー夫人のなかに現実的充足原理を見いだす結果を生むという系路を辿ったために、いよいよ、幸福論的側面と情念的側面の理解へと収斂してしまった。そこから、コールリッジを代表とするイギリス・ロマン主義の功利主義にたいする意義の認識にも偏向が生じ、「ベンサムとコールリッジ」という定式を確立するほどの時流を抜いた洞察を示しながらも、ベンサムの体系の経済学的帰結およびコールリッジの体系の現実政策上の帰結の理解は全くとりおとし、「ドイツ＝コールリッジ学派」(Germano-Coleridgean) という語の鑄造によって、イギリス・ロマ

ン主義の経済観・社会観を大陸モデルに基いて歪曲するという誤りを後世に生じさせたのではなからうか——これが、以下において、私が論証したい事柄であり、その問題性の由ってきたる所の説明であります。次回において、ワーズワス、コールリッジにおける内発性の問題把握の吟味と、連想心理学との対決の分析、とくにコールリッジにおける、それらを基とした「新しい生の理論」の実存的地平における開拓の指摘を行ない、これをミルの「新しい生の理論」と対比し、それに続いて、ベンサム主義の経済的帰結とコールリッジの経済観と社会観の考察を行なって参りたいと考えます。（未完）